

宮城県仙台二華中学校・高等学校
Miyagi Prefectural Sendai Nika Junior & Senior High School

Super Global High School **SGH**

SGH

NEWSLETTER

Vol.1
2015
平成27年5月14日

発行 宮城県仙台二華中学校・高等学校
〒984-0052 宮城県仙台市若林区連坊1丁目4番1号
<http://www.nika.myswan.ne.jp/>

Information

今年度の事業予定

- 7月 北上川フィールドワーク(中3 全員)
- 8月 第1回メコン川フィールドワーク(高2 選抜)
- 8月 グローバル・リーダー養成講座(中3~高2 希望者)
- 9月 北上川・八幡平フィールドワーク(高1 全員)
- 11月 シンガポール・グアム研修旅行(高2 全員)
- 12月 第2回メコン川フィールドワーク(高2 選抜)
- 1月 シンガポール研修旅行(中3 全員)
- 3月 米デラウェア姉妹校交流(高1, 高2 選抜)

Contents

1. 仙台二華のSGHについて
2. 今年度の事業予定
3. 平成27年度第1回メコン川フィールドワークについて
4. 平成26年度第2回メコン川フィールドワーク予備調査報告
5. 平成26年度デラウェア姉妹校交流報告

仙台二華のSGHについて

目指す人物像

困難を抱えている人々に共感し、その人々の視点に立って行動することができる人物

育てたい資質・能力

- (1) 現代社会を生きる地球市民としての「適切な世界観」
- (2) 問題の原因や構造の「本質を見抜く力」
- (3) そこに生きる人々の気持ちを受け入れることができる「共感する力」
- (4) 人間や社会の理想的なあるべき姿を具現化する「構想力」
- (5) 多様な人々の意見を聞き、自分の考えや立場を「相対化する力」

主な取組

- (1) 「世界の水問題」に関する「課題研究」
- (2) 北上川／東北地方、メコン川／東南アジアをフィールドとした「調査・研究」
- (3) 自律的な学習集団を形成し、多様な人々との「言語活動」

研究テーマ

北上川／東北地方、メコン川／東南アジアをフィールドとした世界の水問題解決への取組

SGH Field Work

平成27年度
第1回メコン川フィールドワークについて



5月下旬に募集要項を発表しますが、その概要をお知らせします。変更になる場合があります。

日程:8月上旬の約10日間

訪問先:タイ南部または中部の漁村

及び、カンボジアのシエムリアップ

対象:高校2年生でSGH課題研究ⅡAを選択している者

人数:6名

今後の日程

5月下旬 募集要項の発表

5月下旬~6月上旬 募集締め切り, 参加者決定

6月中旬 参加者向け保護者説明会

予防接種開始, ビザの取得

7月上旬 行程の概略が決定, 業者決定

注意事項

- (1) 宿泊費, 食費, 予防接種等で10万円程度自己負担が発生します。
- (2) 引率は男性教員2名になる予定です。
- (3) 重度のアレルギー, 持病のある方への対応は困難です。
- (4) 本校主催の他の事業との併願もできます。

SGH Field Work 平成26年度第2回メコン川フィールドワーク予備調査報告

平成26年12月20日(土)から11日間、高校2年生4名(男子1名・女子3名)がタイを訪れ、現実の問題・課題に対して、現地の人々に対する英語による聞き取り調査や水質検査、施設見学などを行ってきました。

タイ北部でのチェンライ(Chiang Rai)では山岳民族の村にホームステイし、一緒に料理をしながら日常での水との付き合い方を学んだり、商品作物を作って現金収入を得るようになってから発生した問題などについてインタビューしました。またミラー財団(The Mirror Foundation)の支援を受けて山岳民族の子どもたちが通う小学校を訪問しました。屈託のない笑顔が印象的でした。

また、同じくタイ北部のチェンコン(Chiang Khong)では、農村開発に伴ってメコン川の水質が変わったり、中央政府の意向で勝手に開発が進められることを憂う団体である地元のメコンスクール(Mekong School)の代表にインタビューし、農村の近代化がもたらす影響について議論を行いました。

タイ東北部(Isaan)のムクダハン(Mukdahan)では、カオデー農園という農家にホームステイし、雨季と乾季がある地域での水管理の方法などを学びました。ここでは、近隣の中学生と一緒に水質検査をしたり、豚を自分たちで屠って食べ、命を頂くということを再認識したりしました。

事前指導を含め、今回も多くの方々に支えられ、応援していただいて非常に中身の濃い予備調査になりました。今回得られた情報をみんなで共有し、今年度以降の本格的な課題研究に生かせるようにしていきたいと思えます。



● 第1回
● 第2回



参加者による感想

千葉沙也加(22HR)

私が今回の研修を通して一番驚いたことは、日本とタイの小学生の姿はさほど変わらないということでした。私たちは今回「夢」についての日本語の授業に参加させていただいたのですが、タイの子どもたちの夢は医者や美容師、教師などどれも日本でも馴染み深いものだったのです。夢を自由に描くことができることは環境が違って同じなのだな、と思いました。しかし、帰国後にもう一度考えてみたのですが、私が出会った幼いころから少数派である日本語を学び、貧しい家庭に生まれた子どもたち。きっと彼らは成長し自分の置かれた環境を理解するにつれ夢を持つことができなくなるはずです。子どもたちが夢を失うことは将来の有望な人材の卵を失うこと。有望な人材が少なれば国の発展は滞ってしまい、負のスパイラルが続くことでしょう。私たちは幸せです。今も夢を持ち続けることができます。まずはこの環境に感謝して目標に向かって努力していきたいです。



清水桃奈(26HR)

メコン川フィールドワーク予備調査に参加し、実際に現地の人々の声を聞くことで学んだことは、自分の価値観だけで相手の状況を判断してはいけないということだ。例えば、度々起きている洪水についても、現地の人々は特別に困っているわけではなく、むしろ川の水位の変化は昔からの自然のサイクルだと考えていた。日本は支援をする立場にあると考えがちだが、最新の技術だけを駆使して開発に携わるのではなく、現地の人々の意見を最大限に生かし、本当に必要としているものは何かを共に考えていくべきだと感じた。



また、バンコクなどの都市部とチェンライやチェンコンなどの北部地域との格差も実感した。私たちは、タイを「発展途上国」とすることが多いが、バンコクでは東京と大差ないほど高層ビルが立ち並んでいた。一方で、タイ北部は、まだ雨水や地下水に頼る生活が続いている。どの程度までこの格差を改善すればよいかという問題も、今後の課題研究の大切な視点であることを知った。

上原茉緒(26HR)

タイの山岳地帯や農村を訪問して実際に現地の人々のお話を聞くことで、水に対する考え方や価値観を知り、世界のことを考えるうえで基本となることを教えてもらった気がしました。



印象に残っているのはそれぞれの村の人々が健康問題は特にないと自信をもって答えてくれたことです。現地のことをよく知る日本人に話を聞くと洪水の後お腹を壊すことなどは生活の一部となっていて問題として見られていないと分かりました。国際協力をする際にも私たちが問題だと思うことを解決してあげるのではなく、現地の人々が何を望んでいるのか理解することが重要だと思いました。実際に話を聞き、村を見ることで自分の先入観を取り払い考え方を変わるとも良い機会になったと思います。

徳能克也(引率)

夏のメコン川フィールドワークに続いて、2回目の引率でした。冬のタイ北部はとにかく「寒い」。この時期のフィールドワークに参加する人は注意が必要です。

また、タイの東北部にはメコン川が流れていて、その向こう岸がラオスです。川が国境でその対岸が他国という状況がとても新鮮に感じられました。朝や夕方には、対岸のラオスから生活感あふれる一斉放送や音楽などが聞こえてきました。実際に「足を使った」フィールドワークでしか味わえない醍醐味です。



早坂宙斗(23HR)

私が実際に足を運んで良かったと思うのは、自分の研究に即した調査活動ができるということです。

私は当時、化学物質による河川の汚染について調査していたのですが、複数回に渡って行われた水質調査や、「農薬の使用が農村部でも広がっている」という現地の方のお話から、汚染が進む硝酸態窒素が、農薬由来であることが分かりました。

今回のフィールドワークで得た独自調査を生かし、前例のないオリジナリティに溢れた論文を書くことができたかと考えています。



地主 修(引率)

このメコン川フィールドワークに限らず、旅で一番大切にしたいことは人との出会いです。夏のFWでは、ミャンマーのパルチザンの経験もあるビルマ人を支援するFEDというNGO代表



のHtoo Chitさんとの出会いは、一生の宝物です。今回もタイの最北端Chiang Khongで出会ったクーティさんとの出会いは衝撃的でした。目の前を流れるメコン川のことを決めるのが、そこから遠く離れたところにいる政府の人たちであることに違和感を持ち、単に抗議するだけでなく、ではどうすることが理想的なのかを住民と議論するところから始める古くて新しいタイプのリーダーでした。

姉妹校交流

平成27年3月14日(土)～25日(水)の12日間、高校1・2年生20名が宮城県と姉妹県州となっている米国デラウェア州などを訪れ、姉妹校交流派遣研修を行いました。

研修の1日目、2日目はアメリカの政治の中心ワシントンDCを訪れ、米国議会堂やスミソニアン博物館などを見学しました。3日目からはデラウェア州ミドルタウンでホームステイをしながら、姉妹校のミドルタウン高校と連携校のアポキニミンク高校に分かれて登校し、授業やクラブ活動、遠足に参加したり、震災復興の様子や日本文化を紹介するプレゼンテーションを行うなど、充実した8日間を過ごしました。その後、ニューヨークへ移動し、ブロードウェイでミュージカル“MAMMA MIA!”の鑑賞、自由の女神、エンパイアステートビル、タイムズスクエアなどを訪れ、「世界の中心」と呼ばれるホットな部分を体感しました。

また、今回の研修では、毎年行っているジャック・マーケルデラウェア州知事への表敬訪問も行い、宮城県の高校生大使として、これからの宮城県とデラウェア州の関係の在り方や、これからの高校生に求められるものなど、州知事と活発な意見交換も行いました。



参加者による感想

袖井俊次郎(34HR)

私がデラウェア研修を通じて最も強く感じたことは、日本の生活と海外の生活は本質的には同じであるということです。もちろん国が違えば文化も変わるわけで、食生活や生活習慣など異なる部分はたくさんあります。だからこそ似ている部分がい際立って感じられました。私は現地の高校生と話す時に「英語で話す」という意識が先行してしまい、頭の中で英文を組み立てるのに必死でした。しかし、徐々に慣れてくると、日本で友達と話す時のように冗談を言い合い、時には真面目に語り合うこともできるようになりました。その中で、異なるのは言語だけで、内面的な部分では日本の高校生もアメリカの高校生も変わりはないと思えました。その時から、海外に行くということで変に身構えていた緊張もほぐれ、ホームステイや観光をしっかりと楽しむことができました。

海外と日本の差異に目を向けることも必要ですが、そこから一歩踏み込んで、同じところに気付くことが国際理解なのだと思います。今回の研修は、このような考え方で、世界との一体感を得ることができ、とても有意義な経験でした。

町屋綾佳(26HR)

飛行機を降りて最初に感じたのは、空が広いということでした。何もかもが大きいアメリカの地で得たものは多く、また世界が広がったように思います。

ホームステイ初日は、ネイティブ英語の速さと緊張でなかなか口が開けませんでした。慣れてくると、料理の美味しさ、景色の綺麗さから自分の好きなもの、他愛のない冗談まで、いろいろなものを共有できました。英語を話すことそのものより、自分の英語に乗せて伝えることが大事なのだと実感しました。

この研修を経て、アメリカの端っこ、以前までは無機質だった地図の一点に温かみを感じるようになりました。私たちが一日を終えるころ、ホストファミリーたちの新しい一日が始まる、そう思うととても楽しくなります。もっと自分の英語力を磨いて、数年後にまた会いに行きたいと思います。研修は一瞬でしたが、ステイだけでなく、有名な建造物、ずっと見たかったものも見られました。事前学習からこれをしたためている今に至るまで、貴重な経験は絶えません。関わった多くの方に感謝しています。